

幸福な夢

いしざわみな

登場人物

男1 舞踏家

女1 舞踏家の妻

男2 若い男

女2 若い病気の女

客席が闇に包まれ、静寂を受け止めた観客が落ち着いたころ、どこか遠くから何かが大きく変動するように響き渡る。

長い間。

奈落から立ち昇るように小さな灯りの影が表れ、やがて灯りを持った男1が現れる。

男1、今ではもう数少ない所持品となった時計で時間を確かめ、じつと何かを考える。

夜が明けてゆく。

そこは長いこと使われていない古い劇場である。

舞台上にはテーブル（に代わるもの）、時計、古い本、小さな植物（例えばサンスベリア）などがあり、男1がそこで生活している気配が感じられる。

男1はいつもの朝の、彼にとっての日常のことを行う。

やがて一通りのことを終えると、その古い本を読み始める。

男1 「…今でも、僕の存在は粉々に粉碎され、はてしらぬところへ押流されているのだろうか。僕がこの下宿へ移ってからもう一年になるのだが、人間の孤独感も僕にとっては殆ど底をついてしまったのではないか。僕にはもうこの世

で、とりすがれる一つかみの藁屑もない。だから、僕には僕の上にさりげなく覆いかぶさる夜空の星々や、僕とはなれて地上に立っている樹々の姿が、だんだん僕の位置と接近して、やがて僕と入替ってしまいそうなのだ。どんなに僕が今、零落した男であろうと、どんなに僕の核心が冷え切っていようと、あの星々や樹々たちは、もっと、はてしらぬものを湛えて、毅然としているのではないか。……僕は自分の星を見つけてしまった。ある夜、吉祥寺駅から下宿までの暗い路で、ふと頭上の星空を振仰いだとたん、無数の星のなかから、たった一つだけ僕の眼に沁み、僕にむかって頷いていてくれる星があったのだ。それはどういふ意味なのだろうか。」

突然、扉が開く。

大きな荷物を背負った若い男、メモのような地図を手に立っている。

男2 港……港まであとどのくらいでしょうか？

男1 (見つめている)

男2 最後の船が出る港です！

男1 (失望) ……

男1、地図を見せるように促す。

男2、中に入り男1の傍に寄り、それを見せる。

男1 三〇分もあれば着くよ。

男2 (安堵して) そうですか…… ありがとうございます。(去ろうとする)

男1 出発は十二時だ！ まだ五時間もある。

男2 ……

男1 少し休んでいくといい。

男2 (表情を緩め) 助かります。

男2、荷物を降ろして水を飲もうとするが、大きな水筒に水は少ししかなく、ほんの少しだけ水を飲む。

男1、さりげなくその様子を窺っている。

男1 遠くから？

男2 (頷いて) 丸一日とちよつと歩きました。

男1 ……どうして今まで？

男2 母親が死にかけていました…

男1 ……

男2 穴を掘っていました。

男1 穴を？

男2 大昔は土に埋めていたといいますが、人間は案外大きいものです。けつこうたいへんでした。

男1 (言葉が出ない)

男2 あと何人くらい残っているでしょうね。

男1 ……

男2 (外は) 暗いですね。

男1 (頷いて) 雲が出ているのさ。

男2 爆弾が落ちたから？

男1 たぶん… 大きな爆弾が落ちると大きな雲が出て、やがて雨が降るらしい。

男2 ……学者なんですか？

男1 (笑って) 冗談じゃない。百年くらい前、同じようなことが起こったと、この本で読んだんだ。

男2 光ってましたよ。

男1 ……

男2 空に何か光ってました。あれが…ホシってやつでしょうか？

男1 たぶん違うな。

男2 そうですね。

男1 君はいくつ？

男2 もうすぐ二十歳(はたち)です。本物のホシ、見たことありますか？

男1 君くらいのころにね。

男2 (辺りを見回し) ここは劇場ですよね？ ここで暮らしてるんですか？

この街の人間ですよね？

男1 (頷く) 生れたのは、もう少し西の方。ずいぶん昔にここを離れて、もう

何年も帰ってなくてね。

男2 わざわざこっちへ入ってきたんですか？ 信じられない人だな…

男1 ずっと昔、ここで踊ったことがあるんだ。

男2 どんな非常時でも、れっきとした不法侵入ですよ。

男1 (苦笑い) ……

男2 それで、あなたは船に乗らないんですか？

男1 ……

男2 ここで何を？

男1 人を待っている。

男2 ……

男1 妻を待っている

男2 ……

男1 もう、たぶん来ないと思う。……もともと可能性はないんだ。夢だ……

間。

男1 時間をくれないか？ 私の話を聴いて欲しいんだ。

男2 ……

男1 頼む。たぶん人と話すのもこれが最後だ……君に会えただけでも幸運だった。すぐに済む。少し……少しだけ私の話を聴いて、私を……私という人間が存在したということを憶えていてほしいんだ。

男2 ……船に間に合うのなら……いいですよ。

男1 (感激して) ありがとう、感謝するよ。そうだ、朝食をごちそうしよう。

男1、奈落へ降りていく。

男1、水の入った瓶と食べ物を持ってきて男2の前に置き、コップに水を注ぐ。

男2、勢いよく水を飲み干し、むせる。

二人、顔を見合わせ、小さく笑い合う。

男1、躊躇する男2に食べるように促し、再び水を注ぐ。

男2、噛みしめるように食べ、男1は満足そうに眺める。

男1 ……妻とはもう一五年も会っていない。私がいなくなったんだ。ある日突然……ひどいだろう？ ……私はダンサーだった。今だってダンサーだ……魂はね。自分の踊りを求めて踊り続けた。すべてを踊ってみたかった。あらゆる喜びを、あらゆる憎しみを、あらゆる感動を……草花も、星も月も大地も……すべて踊ることができると思っていた。妻は、私に会った瞬間から私の踊りを疑わなかった。私の未来を信じ切っていた。熱狂していたと言ってもいい。私はそのまっすぐな素直さに甘えていた。騒がれたこともあったんだ、少しばかりの才能をね。

男2 ……

男1 ……でも不安だった。何の仕事にも就かず、世間にも知られず、ひたすら踊り続けてゆく。自分はそれでいい……後悔はない。だが、妻は……一人の女が信じようとしている男、その男が何も成し遂げられなかったとしたら……恐ろしかった。逃げ出したんだ。そうして一人で踊り続けて……齢を取った。

（微笑）もう、ここから脱出する気はないんだ。もうこのまま自分を終わりにしてもいいと思っている。

男2 じゃあこのまま……

男1 もう十分生きた。……私が君くらいのころ、男も女も八〇年近く生きていた。それほど倅せそうでもなかった……私はもういい。

男2 何考えてたんでしょうね、そのころの人たちは……

男1 ……

男2 未来をどんなふうに思ってたんでしょうね……あつという間にこんな……

男1 ……

男2 すみません……続けてください。

男1 ……もうすぐ本当にたった一人になるんだって考えた時、思った。芸術

は、芸術のための芸術ではなく、観客のための芸術だと信じてきたのに……私は誰かのために踊ったことがあっただろうかって。確かに人を感動させることを考えてきた。だがそれは、誰かのために踊ることだっただろうか……最後に、最後にもう一度、彼女の前で、彼女のために、彼女のためだけに踊りたい……そう思つて……

男2 連絡は？

男1 運よく昔の友達に会ったんで、手紙を頼んだ。彼の話では、妻はまだ……まだもとの家にいるはずだと（間）でももうだめだ。これから来るとは思えない……仕方ない。

男2 ……

男1 だが、君に会えてよかった。ありがとう……話を聴いてくれてありがとう。心から感謝するよ。さあ、これも飲んでいってくれ。

男1、自分の水を差し出す。

男2 船に乗れば、会えるかも知れないじゃないですか？ いっしょに行きまし

よう。

男1 （首を横に振る）運命だよ。これでいいんだ。

男2 （強く）でも……

男1 （さえぎって）船に乗れば……いつか会うかも知れない。だが妻は私に会いたくないかも知れない……殺したいほど憎んでいるかも知れない……そんなもんだよ。さあ……

男1、男2の荷物を持ち上げ、半ば強引に背負わせる。

男2、嫌がって動こうとしない。

男2 (抵抗しつつ) 飢え死にするのは辛いですよ。

男1 大丈夫だ。

男2 (苛立って) そんな簡単に……

男1 飢え死にする前に自分で終わらせるよ。

男2 ……

男1 (優しく) さあ、行きなさい。雨が降らないうちに。

男2 (仕方なく) じゃあ……

男1 元気で。がんばって生きてくれ。

男2 あなたもがんばってください。

男1 ああ、がんばって死ぬよ。

男2 (堪える) ……

男2、出て行く。

男1、少しして堪えられなくなったかのように、扉を開けて、

男1 雨に濡れるな！

男1、奈落へ、水と食べ物を片付け、戻ってきて本を手取る。何十

回、何百回と読んできたそこにある言葉はすっかり体に沁みこみ、孤独

な心の支えとなり彼自身のものとなっている。

男1 「……どんなに僕が今、零落した男であろうと、どんなに僕の核心が冷えて、毅然としているのではないか。……僕は自分の星を見つけてしまった。ある夜、吉祥寺駅から下宿までの暗い路で、ふと頭上の星空を振仰いだとたん、無数の星のなかから、たった一つだけ僕の眼に沁み、僕にむかって頷いていてくれる星があったのだ。それは……」

いつの間にか扉が開き、女1（妻）が静かに立っている。

男1、動けない。

ふたり、じっと見つめ合い、やがて堰を切ったように抱きしめ合う。

恐れながら強く、愛にあふれて優しく、抱きしめ合う。

男1 ……よくここまで……

女1 あなたが呼んだのよ。

男1 ……

女1 さすがに老けたわね。

男1 （興奮して）君は変わらない。

女1 ……時間がないわ。

男1 そうだな（気持ちは踊りに向かっている）。

女1 やけになった人たちが家火をつけたりしてるのよ。どうせもう住めなくなるのなら………恐いでしょ、焼け死ぬのは？

男1 ……手紙に書いた……

女1 ……その上着、まだ着てるのね……

男1 ……

女1 (ピシヤリと) あなたの踊りに来たわけじゃないの。

男1 ……

女1 あなたが望めば望むほど、それに応える気はなくなるのよ。自分のことしか考えて来なかった人が、最後の最後に誰かのためにとって……それで満足しようなんて甘いわ……

男1 満足しようなんて……

女1 そんなことで許されない。

男1 (呆然) それを言いに来たのか……

女1 別れてほしいの。

男1 (驚く) ……

女1 (自分を奮い立たせるように) あなたに置いていかれるのではなく、私自分から別れたいの。だから来たの。

男1 ……そうか。

女1 永かったわ、一四年と八か月……

男1 ……そうだな。

女1 そうよ……

ふたり、見つめ合う。

女1 おかしいわね。

男1 ……？

女1 「過去」なんて何の意味もない、自分が向き合いたいのは「今」というこの時だ……踊りに過去はない、いつも未来を踊るんだって言ってたあなたが死

を選ぶなんて。踊りたいように踊って、生きたいように生きて、死にたいように死んでゆくのか……最後まで自分のために踊れば？

男1 違う！ そうじゃないんだ！ そうじゃなくて……

女1 (さえぎって) ひとつだけ教えて……私を嫌いになったからいなくなったの？

男1 違う！ 絶対に違う！ 聞いてくれ、俺は……

女1 (さえぎる) それだけでいい！

男1 ……

女1 それだけ聞きたかったの。それ以上はもう何も聞きたくない。やっとあなたの呪縛から逃れられる……このまま行かせて……

男1 ……

女1 あまり苦しめないよう……祈ってるわ。

女1、風のように去ってゆく。

男1、絶望に打ちのめされる。その手は無造作に本を取り上げ握りしめているが、開くことはなく見てはいない。

男1 「……声はつぎつぎに僕に話しかける。雑沓のなかから、群衆のなかから、頭のなかから、僕のなかから。どの声もどの声も僕のまわりを歩きまわる。どの声もどの声も救いはないのか、救いはないのかと繰返している。その声は低くゆるく群盲のように僕を押しってくる。押しってくる。押しってくる。そう、僕は何年間押されとおしているのか。僕は僕をもっとはつきりたしかめた
い。

しかし、僕はもう僕を何度も何度もたしかめたはずだ。今の今、僕のなかには何かがあるのか。救いか？ 救いはないのか救いはないのかと僕は僕に回転しているのか。回転して押されているのか。それが僕の救いか。違う。絶対に違う。僕は僕にきつぱりと今云う。僕は僕に飛びついても云う。

……救いはない。

僕は突離された人間だ。還るところを失った人間だ。突離された人間だ。還るところを失った人間に救いはない。

では、僕はこれで全部終わったのか。僕のなかにはもう何もいいのか。僕は回転しなくてもいいのか。僕は存在しなくてもいいのか。違う。それも違う。僕は僕に飛びついても云う。

……僕にはある。

僕にはある。僕にはある。僕にはまだ嘆きがあるのだ。僕にはある。僕にはある。僕には一つの嘆きがある。僕にはある。僕にはある。僕には無数の嘆きがある。」

男1、床にひれ伏す。

静寂。

突然、若い女（女2）を背負った男2が入ってくる。

女2の背中には、男2の上着が着せられている。

男2 よかった……いて……（女2を降ろす）この人、船に乗れないんだ。理由はよくわからない……みんなはスパイだと言ってた。敵に身体を売ってたって……

男1 ……

男2 ひとりで逝かせるのはかわいそうだから、もしあなたがここに残るなら…
…奥さんは？

男1 ……

男2 来なかったんですか？

男1 ……来なかった。

男2 船には？

男1、女2を見つめたまま。

女2、生気がなく、ぐったりとしている。

男1 まだ子どもじゃないか……（上着に気がついて）雨が降るといけない。私
のを貸そう。

男1、自分の上着を脱いで男2に渡そうとする。

男2 （戸惑う）貸してもらっても、もう返せない……

男1 （微笑む）来世でいいよ。（男2に上着を着せてやる）

男2 ……

男1 （あらたまつて）ひとつ、教えて欲しい。

男2 はい。

男1 君の侍せは……夢は？ こんな世界でも、君たちは……夢を持てるだろう
か？

男2 ……小さな家と小さな土地があつて、種をまいて、育てて、毎日の食事が
あれば……争いがなくて、青い空ときれいな水があれば……

男1 ……いい夢だ。さあ、急ぎなさい。あまり時間がない。

男2 さようなら。

男1 さようなら。

男2、行きかけるが、決心したように振り返り、ポケットから小さな瓶を取り出し、男1の手に握らせる。

男2 ……苦しまず、いつでも……眠ることができません。

男1 ……！

男2 母は……もう、助かる状態じゃなくて……ゆっくりゆっくり小さくなって……最期まで見ていたかった……ぎりぎりまで待った……でも時間がなかった。僕には時間がなかった。僕は、僕は生きたかった。いっしょに死ぬわけにはいかなかった。生きなくては……生き抜かなければ……せつかく生まれてきたのに……こんなところで……

男1 ……

男2 僕は人殺し……

男1、思わず男2を抱きしめる。

男1 いいんだ！ 子どもは親を超えてゆくもの……犠牲になってしまったら生まれてきた意味がなくなってしまう。それでいいんだ……

男2 ……

男1、やがて身体を離し、右手を差し出す。

男2、差し出された手をゆっくりと握りしめた後、去ってゆく。

男1、しばらく見送る。

静寂。

やがて、雨が降り始める。その雨音は無数の死者たちの声の粒のようでもある。

男1 もう誰も来ないだろう（包みをながめ）助かった……飢え死には怖い。

女2 そうね……

男1、驚いて振り向く。

女2 あたしも、飢え死にはいや……このまま死ねたらいいんだけど……

男1、女2の傍に寄る。

女2 死ぬってどんなかしら……ホシになるってほんと？

男1 ……（頷く）

女2 そう……うれしいわ。

男1 ……

女2 ……もう、ひとりで死んでいくんだなあって思ってた……誰かがいるって
ほっとする……

男1、女2の手を握ってやる。

静寂。

雨の音だけが響いている。

女2 (はっとしたように) ねえ、どうして？

男1 ……？

女2 ……どうして行かないの？ 船が出てしまうわ。……もうすぐここは死んでしまうのよ。……あなたは病気じゃない。わかるわ……あつたかいもの。まだ生きられる人よ……

男1 もういいんだ。

女2 何が？

男1 ……よそへは行きたくないんだ。ここにいたいんだ。

女2 ここは……ここではもう生きられないのよ。もうすぐ雨が降って、その雨を吸ってしまった大地は……何も育たなくなるの。草も樹も、鳥も……人も……

男1 ……

女2 行かなくちゃ……早く……それは許されないことなの、それは自分では決められないの……それは……それは酷いことなの……！ 酷いことなの……！

男1 約束したんだ！

女2 ……

男1 約束したんだ……妻と、ここで会う約束を……したんだ。事情があつて、離れ離れになってしまった……でもふたりはいつも一緒なんだ。いつも……一緒なんだ。一人では行けない。約束したんだ。ここで会うつて……たとえ船に間に合わなくても、僕は彼女を待つ。一人にはできない……

女2 ……しあわせね。

男1 ……

女2 あたしには、とうとうそんな人は現れなかった……いろんな男の人を抱きしめたけど……そんな人は……

男1 ……いつから？

女2 さあ……覚えてない。もうずっとだもの……あたしにとってそれが生きることで……それがすべてで……しあわせだとも思ってた。喜んでくれるとうれしかったし……男の人の身体に触っているのが好きだった……ぴったりくっついていてるのがいちばん好き……いちばん安心する……ひとりじゃないのはその時だけだし……

男1 ……

女2 男の人は若い子が好きだから……齢を取るのは恐かったけど……世界が変わっても、あたしの仕事は変わらなかったから……そうじゃない毎日を考えたかった……

男1 ……

女2 もう時間ね……船が出る……

窓から微かな光が差し込んでいる。

雨がやみ、かすかに明るくなり始めているらしい。

女2 ……ねえ、お願いがあるの。

男1 ……（微笑む）

女2 ……あたしが死んだら、外人墓地に埋めて欲しいの。

男1 ……？

女2 あたしのおばあちゃん、あそこに眠ってる。……ずっとむかしにね、プリ
ピヤチってとこに住んでいたんだけど……そこもやっぱり人の住めない街にな
っちゃったんだって……

男1 ……！

女2 ……ずっと帰りたいって……言ってた……いつか帰ろうって言ったら、あ
と九〇〇年って……知ってる？ プリピヤチ……

男1 (頷く)

女2 ……母さんは、どこかへ行ってしまった……基地で知り合った人と……。

ね、お願い……埋めてくれる？ おばあちゃんのとこに……埋めてくれる？

男1 ……わかったよ。

女2、嬉しそうに微笑む。

女2 ……もう少しだと思っただけど……なかなか息が止まらないわ……

男1 いいよ……ゆっくりで。

女2 ……ありがとう。

静寂。

女2 ……ねえ、踊って……

男1 ……

女2 ……あの子が言った。あなた、踊りを踊るんだって……ねえ……踊って
……

窓から差し込む光、だんだん大きくなっていく。

音楽が響きはじめる。少女だけに聞こえているのかも知れない。

男1、女2の手を包み込むように強く握り、胸に当てる。そして、小さく刻まれている命を感じる。その魂を自分の内に取り込むかのように身体を縮め、やがて、ゆっくりと天に向かって大きく手を広げ、舞う。

女2は、嬉しそうにその姿を見つめる。

女2　ありがとう。とても美しいものね……人間ってこんなに美しいのね……あなたは死なないわ。だってあなたは踊ってるんだもの……踊ってるあなたは止まらない。……それは未来よ……未来を踊っているのよ……それはまだ来ていない時間なの……だからあなたは死ぬことはない……

光のなか、女2は静かに息絶える。

静寂。

男1、傍にかけより、覆うように抱きしめる。

やがて顔をあげると、いつの間にか女1が、男2に貸したはずの上着を着て、扉の前に静かに立っている。

見つめ合うふたり。

暗転。

エピローグ

女1、朝食の支度をしている。その傍で、男1はいつもの、彼にとっての日常のことを行っている。

やがて食卓が整う。

男1 どうして船に乗らなかった？

女1 ……あなたと、世界の終わりを見たいと思ったから。

男1 ……

女1 恐がることはないわ。ここがいつ滅びるとしても……恐がることはないわ。今まで通り暮らしていくの。

男1 ……

女1 私、種を植えるわ。ここにこうして土がある限り、種をまいて、育てるわ。

男1 ……俺はどうすればいいんだろう……

女1 もちろん、踊るのよ。

男1 踊る？ 何のために？

女1 あなたのために。あなたが生きるために。未来のために……

女1、真赤なリンゴを差し出す。

男1、リンゴを手取る。

女1、ナイフを差し出す。

男1、ナイフを手に取り、やがてリンゴを剥き始める。

女1、その姿を見つめている。

十五年の空白が感じられない光景のなか、ゆっくりと溶暗。

幕

※引用文献

原民喜 『鎮魂歌』 『心願の国』 『夏の花・心願の国』 新潮文庫所収